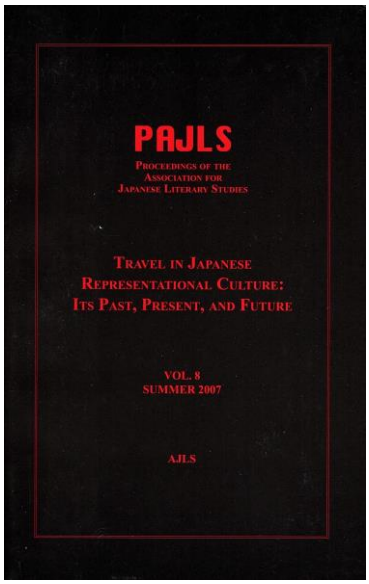
「オデシコ：強制の宴がトシを改める」
“Forcing a Feast: Cruel Hospitality and the Energy of Renewal”

Takashi Lep Ariga

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 8 (2007): 469–478.



PAJLS 8:
Travel in Japanese Representational Culture: Its Past, Present, and Future.
Ed. Eiji Sekine.

オデシコ：強制の宴がトシを改める
FORCING A FEAST: CRUEL HOSPITALITY AND THE ENERGY OF RENEWAL

Takashi Lep Ariga
Gakkan International

梓川村には旅するな

もしもあなたにタイムトラベルの能力があるとして、１８８０年以前の松本藩（現・長野県松本市付近）に興味があったとしても、旧暦十一月二十三日に現在の松本市梓川付近にお越しになることだけはお勧めできません。中でも氷室と呼ばれるムラには絶対に近づいてはいけません。それは、その日にそのムラに近づく訪問者には行きすぎたお接待が待ち受けているからです。

不幸にしてあなたがこのムラの霜月二十三夜の客になってしまったとしたらあなたはどのような接待を受けるのか、これはこの小論に大きな関係がありますからまずはそれからお話しすることにしましょう。

この日は「オデシコ」と呼ばれる祭日で、あなたはおそらく唯一の客人のはずです。年に一度のこの特別な日をわざわざ選ぶようにしてこのムラに入ってきた不思議な訪問者にムラ人達は多少興奮気味です。見れば、まるであなたの訪問がわかっていたかのように宴の用意は既にできあがっているではありませんか。

請われるままに客座に座ったあなたへの接待料理は、まずケンチャンで始まります。ケンチャンとはよく知られている名でいえばケンチン汁のことです。大根やゴボウなどを細切りにしたものと豆腐などを中心の具にしたありふれたスープですが、そのケンチャンを目にしてあなたは椀の大きさに驚くことでしょう。一体、これだけのケンチン汁を平らげることができるのか心配になってしまうほどの大きさです。

接待を受けるお客様ですから、あなたにはせっかくのご馳走を残してしまっては申し訳ないという気持ちが働くでしょう。残さずケンチャンを食べ終えます。しかし、ほっとしたのも束の間、次には小豆粥が待っています。それがまたオダイシワンと呼ばれる直径が３０センチメートルはあろうかという巨大な椀になみなみとよそわれているではありませんか。あなたは見ただけで満腹になってしまうことでしょう。

小豆粥のあまりの多さにたじろぐあなたを、オショウバンと呼ばれる役目のムラ人が何人かで見つめています。先ほどあなたがケンチャンをきれいに平らげた時にはニコニコしていた彼らの表情が、小豆粥を前に固まってしまったあなたを見てにわかに険しくなり始めました。彼らはあなたの隣で「さあ残さずお上がり」と盛んに小豆粥を勧めます。何度も言葉をかえて断るあなたですが、彼らは決して許してくれません。

何回目にあなたが断ったときでしょうか。進まぬ食事にオショウバンの一人がとうとうこう言い出します。

「仕方ないから掟のようにしよう。」

その声にあわせて大きく頷いた他のオショウバン達に腕を掴まれて、接待の席を立ったあなたは土間に降ろされます。苦しい接待はこれでやっと終わったのでしょうか。いいえ違います。その証拠に、ご覧なさい、あなたの後ろには大きな梯子が用意されているではありませんか。息をのむ間もなくあなたはその大梯子に縛り付けられてしまいました。頭には「ワルンダ」と呼ばれる木製の固定具が付けられ、もう身動きもなりません。

「飯を食わぬとこうするぞ。」

一人の男があなたに向かって声高に叫びます。見れば手には大きな木製のヤットコのようなものを持っています。その道具で男はあなたの鼻をぎゅっとつまんでしまいました。そうされては口で息をするしかありませんから、あなたは薄く口を開くでしょう。その瞬間をオショウバン達は見逃すはずはありません。木でできた特殊な杓文字を使ってえいとばかりにあなたの口をこじ開けるのです。そこへ匙で小豆粥を無理矢理押し入れ、今度はあなたの口を閉じてしまいます。

小豆粥を詰め込まれた口を閉じられてしまっては苦しくてたまりません。あなたは仕方なく粥を飲み込んで大きく口を開けて息をしようとします。少し空気が入ったのも束の間、さらに小豆粥が口に捻じ込まれるのです。こんなことを繰り返すうちにあなたの意識は薄れていきますが、それでもオショウバン達は容赦してくれません。村人達が輪になって見守る中、あなたへのこの「接待」はあなたが小豆粥を全部食べ終わるまで続くのです。

小豆粥の最後の一匙があなたの口に入れられました。朦朧とした意識の中であなたは村人達の歓声を聞きます。「死んでしまってもいいから全部食わせろ。これで来年も豊作だ。」

もう一人では歩けないあなたですが、ムラ人達は休ませてくれるはずもありません。今度はモッコに乗せられてムラはずれまで連れて行かれます。そこであなたは解放されるのですが、あなたをムラの境界の外に送り出したムラ人達はあなたに気を使う風も一向になく嬉々としてムラに帰って行ってしまいました。

さて、あなたは命からがら現代に戻ってくることができましたが、当時はこのお接待が原因で命を落とす来訪者もあったと言います。あなたがそうならなかったのは不幸中の幸いというほかはありません。

ムラではこの接待のことを「オシゲ」と呼んでいます。「ケ」は朝餉（アサゲ）や夕餉（ユウゲ）という言葉があることでもわかるように、食事や食物のことを指しますから、まさに強要する食事と言うことでしょう。その証拠に、終戦直後までは客に対して厚意を持ってごちそうを強要しようとする主に対して、満腹の客が「もうそのようにシゲないでください」というような断り方がこのムラには残っていたといいます。この強制的な飲食が人々の日常生活の中にも感覚として入り込んでいたのです。

旧暦霜月二十三夜に梓川村の氷室を訪れてはいけないのはまさにこのオシゲのためなのです。[1]

なぜ小豆粥か

このムラに全く関わりがないあなたがどうしてオシゲに合わなければならなかったのでしょうか。実はあなたが全くの異邦人＝旅人だったからこそ、このような接待にあずかってしまうことになったのですが、その前にオシゲの御膳がなぜケンチャンと小豆粥だったかについて考えておきたいと思います。

このオシゲは「オデシコ」と呼ばれるお祭りのフィナーレです。「オデシコ」は御大師講が訛ったものであるのは明らかです。全国的に見られる祭ですが、お大師様という仏教的な存在を祀るための行事というよりも、むしろ民俗行事としての色合いが濃いものが圧倒的に多いと言われています。[2]

このムラのオデシコも他の多くの民俗的大師講に共通する要素が見られます。

その一つは、「御大師荒れ」とか「御大師吹き」と呼ばれる雪嵐にまつわる説話で、次のような話として伝えられています。

「昔御大師様が貧しく汚い身なりで、これまた貧しいムラのある家を訪れ一夜の宿を所望しました。そこには足の悪い老婆が住んでいましたが、この貧しい僧をもてなそうと、悪いこととは知りつつ隣の畑から大根を一本盗んで夕餉の善としました。それを知った御大師様は足の悪い老婆の足跡を消すためにその夜雪を降らせました。その雪はその後も決まって霜月二十三夜に降るようになったので、ムラ人達が「御大師荒れ」とか「御大師吹き」などと呼ぶようになったのです。」

実際に、氷室にもこれと酷似した言い伝えが残っていました。全国に広く聞かれるこの物語の老婆は大根を御大師様に召し上がって頂いたのですが、それはケンチャンの中にも入っていたことを思い出してください。別の説話の中では、老婆が御大師様に差し上げるのは隣の田の穂架けから

---

[1] この行事についての詳細は、１９９９年夏に梓川村（当時、現松本市梓川在住の方々にうかがった聞き書きと、梓川村在住で同村誌編纂委員の田中千万吉さんへのインタビューと同氏からいただいた資料に基づいている。
また、この強制的な晩餐「オデシコ」に使った責め道具は終戦直後までは残っていたそうだが、今はその写真だけが保存されているという。筆者はその写真のコピーはいただけたが写真そのものは拝見することはできなかった。

[2] たとえば五来重（１９９４）は、大師講の主役は弘法大師ではなく、収穫祭や新嘗祭の夜子孫を来訪する祖霊に違いないとしている。また、民俗的大師講に共通する要素として、①祭日が霜月二十三日であること、②大師講吹きがあること、③この日の食物に大根のあること、④小豆粥を炊くこと。⑤大師講の汁を庭に撒くと害虫よけになると信じられていること、⑥大師講の神供に際しては三本の不揃いの箸を付けること、そして⑦この夜風呂を涌かし大師様を入れるといっていることを挙げている。氷室のオデシコはこのうち最初から４つの条件を満たしている。

盗んできた米で作った粥であるとされています。これこそはあなたがシゲされた食べ物です。つまり先ほどあなたが食べさせられたのと同じような食事が、御大師様がお泊りになったまさにその晩に用意されていたのです。

旧霜月二十三日といえば今で言う冬至です。太陽の勢力が一番弱くなり、翌日から少しずつ復活する境の日の祭りに食べられるものですから、それは重要な意味を持つもののはずです。ケンチャンはちょうどその頃収穫された野菜と、夏に収穫され十分に乾燥された大豆が主原料です。一年の収穫を省みながら神に感謝するにはもってこいの料理といえるでしょう。

さて、なぜ小豆粥が用意されていたかについてです。もともと日本の各地で小豆は年越しに食べられてきました。今も正月の鏡開きにはお汁粉とかゼンザイを食べますから、古い年が去って新しい年の幕開けには欠かせない食べ物として小豆を用いる日本人の気分は今も変わらないのかもしれません。[3]

しかし、一体小豆にはどんな力があるのでしょう。次の幾つかの説話から少し考えてみることにしましょう。

最初は、羅生門に住む鬼の腕を切り落としたことで有名な渡辺綱という平安時代の武将の話です。この人は切り落とした鬼の腕を幾重にも布に巻き桐の箱に入れて誰にも見せないようにしていたと言われています。しかし、年末の二十三日の夜、家の者が小豆を煮ていると、そこに乳母が山形から尋ねてきて、どうしても鬼の腕を見せてくれと言ったそうです。

綱は「誰にも見せないようにしているものだから申し訳ないが見せることはできない」と断ります。それを聞いて乳母は非常にがっかりして、はるばる遠くから綱の武勇の印を見ることを楽しみにしてきたのに何と冷たい仕打ちだ、と言って泣き出す始末です。綱は仕方なしに桐の箱から鬼の腕を出して見せますが、乳母はそれを手に取ると

「ほう、これが鬼の腕か」

と言いながらその傷口のほうを煮えている小豆の中につっこんで、それを自分の袖の中に入れてしまいます。するとどうでしょう、腕は生き生きと動き出し乳母は鬼の姿になってしまいました。

「これは俺の腕だ」

鬼はそう言いながら、綱の家の煙だしから天に昇っていってしまったと言うことです。[4]

二つ目はナマハゲに関連した言説です。ナマハゲはご存じのように秋田県の民俗ですが、元々は「ナモミハギ」と呼ばれていたようです。ナモミ

---

[3] たとえば、日本民俗文化体系９、p.274には「アズキ粥も農耕儀礼には欠かせない要素である。有名なところでは一月十五日の小正月の際のアズキ粥や粥占いがあるが、秋から冬にかけての行事では旧暦十一月二十三日から二十四日にかけての大師講のアズキ粥がある。この日ダイシ様が来るといって旅人を招待してアズキ粥を食べさせたとか、この日は弘法大師が来るので待っているとかいう。また、大師講を開いて弘法大師を祀りアズキ粥を食べるなどの習俗もある。」と紹介されている。

[4] 沼田曜一　「あずきまんまの話」に山形県の民話として紹介されている。

は囲炉裏などの火にあたりすぎた時にできるヒダコのことで、働かない者の看板です。それを剥ぎ取ってしまう者という意味です。

現在のナマハゲは「泣く子はいねがぁ」などと言って家々を回っているようですが、昔はそうではなかったようです。たとえば、柳田国男は「小豆コ煮えたか煮えたかよ」「包丁コ研げたか研げたかよ」「ナモミコ剥げたか剥げたかよ」と言ってナマハゲが回ったと報告しています。[5]

ナモミコのついているような怠け者から、包丁でそれをはぎ取って小豆と一緒に煮て食ってしまおうというのだそうです。そうするとナモミコを作るような「ずつなし」が直り、こまごまと体を動かすまめな人間になると考えられていたのです。

もう一つ。これはお隣韓国の説話です。「小豆粥ばあさんと虎」という韓国の昔話の中でも特によく知られているものです。[6]

昔、ある山里に一人のお婆さんが畑で小豆を作りながら暮らしていました。ある日、虎が山から現れてお婆さんを食おうとします。お婆さんは、

「今育てている小豆を秋になったら粥にする。一杯でいいから食べさせておくれ。そうしたら私を食べても構わないから。」

と、虎に命乞いします。虎はばあさんだけでなく小豆粥まで食べたくなったのでそれまで待つことにしました。

秋になり、お婆さんは小豆粥を煮ています。けれども、これを食べてしまえば虎に食われてしまうと思うと悲しくてなりません。思わず泣いていると、どこからか卵が転がってきてお婆さんに泣いているわけを尋ねます。お婆さんが訳を話すと

「それなら、その小豆粥を私に一杯くれたら助けてあげる。」

とその卵は約束します。おばあさんが小豆粥を振舞うと卵はどこかに行ってしまいます。

なお心細くて泣いているお婆さんの所にスッポン、ウンチ、錐、石臼、筵、背負子など身の回りにあるありふれたモノが出てきて小豆粥を食わせる条件でばあさんを助ける約束し、婆さんは小豆粥を食べさせます。

ある晩、ばあさんを食ってしまおうと虎が来ます。真っ暗な土間を照らそうと竈の火をおこそうとした時に、竈に隠れていた卵が虎の目をベシャッとひっぱたきました。目を洗おうと虎が水瓶に行くと今度はスッポンが手をガブリ、虎が慌てて後ずさりするとウンチを踏んで滑って転んでしま

---

[5] 定本柳田国男２ p.312 「ナマハゲは元来ナモミハギという。それは次のような唱え言でわかる。『ナモミコ剥げたか剥げたかよ、包丁コ研げたか研げたかよ、アヅキコ煮えたか煮えたかよ』（中略）ナモミは『秋田方言』によれば火斑（ひがた）即ち長く久しく火に当たっている者の皮膚に生ずる斑紋のことで東京でもヒダコともアマメとも言って通ずる。一言で言うなら働かぬものの看板である。それをこの年の夜の恐ろしい訪問者が包丁を研ぎすまして身から剥ぎ取り、小豆と一緒に煮て食ってしまおうというのが上の唱え言のできた時の趣意であった。とにかく以前は小さい子どもばかりを脅かそうとしていたのではないことは想像に得られる。」

[6] チョホサン「あずきがゆばあさんとトラ」アートン社刊（２００４年）による。

います。転んだところに待っていたのは錐でした。ブスリ。逃げ出そうとする虎が扉に近づくと、上から石臼がドシンと乗っかって虎を押しつぶしました。すると筵がそれをくるくる包んで、背負子がそれをヒョイヒョイと川に運び、虎の体をドボンと放り入れてしまいます。

この話が暗示しているのは小豆がもっているある種の魔力のような力です。身の回りにあるモノが小豆を食うことによって備わっている力をすべて存分に発揮し虎を退治するのですから、備わっている能力を現実のものとして発揮させる引鉄のような不思議な力が小豆にはあるのかもしれません。

考えてみればナマハゲも小豆の力を借りて「ずつなし」の証であるナモミコの威力を消し去って体を動かして働く意欲を人々に与えますから、ここでも人が元来持っていて、しかし怠け者になっていて使うことの少なかった能力を動き出させる力が小豆にあったことをナマハゲたちが知っていた証であるといってもいいでしょう。韓国でも小豆に同じ働きが宿っていると考えられてきたことを示しているのが「小豆粥とばあさん」なのです。

渡辺綱から腕を取り返した鬼が自分の腕を元通りにくっつけてしまう時、煮えた小豆に傷口を付けたのも、小豆の力を借りて腕の持つ再生力を呼び覚ましたと考えられるはずです。綱の鬼の場合、小豆の触発の力はそれにとどまらず、変身して人間になっていた姿を元の鬼に戻してしまう働きをしたと見ることもできます。元々が鬼だった人間だとはいえ、人を鬼にしてしまう小豆の力は大きいといわざるを得ないようです。

こう見てくると、氷室の人たちがあなたに小豆を食わせたのも、そこに何かの力を再生させる祈りを込めたためだと推測するのは自然なことです。そこで何の力を再生させようとしたのかを考えると今度は粥の持つ特別な意味も浮かび上がってきます。

粥はその煮え具合で来るべき年の作況を占う「粥占」[7] に使われるように未来を予言する力があると考えられていました。それを小豆と一緒に食えば、粥の占うべき将来が持っている本来の力を発現させることが出来る、そうムラ人達が考えていたとしても何の不思議もないでしょう。

小正月に小豆粥を食っていた地方はたくさんあります。それが豊穣儀礼と考えられているのは、粥の将来を占う力と小豆の本来的にありながら隠されている可能性を発揮させる力が信じられていたからだと考えることはできないでしょうか。そうだとすれば小豆粥が冬至のオデシコで食べられるのは相応しいと言えます。来るべき年の豊穣を実現させるために何かを食べるとしたら、小豆粥以上のものはないでしょう。

---

[7] 粥占については「定本柳田国男１」「日本民俗学大系６」など数多くに取り上げられている。

なぜオシゲをするのか

小豆と粥の力を信じてこの日の訪問者をもてなすオデシコですが、なぜそれを強制的に食べさせなければいけないかという問題があります。長野県町村史の南信編[8]によれば、「ついに死に至るも官之を措（お）いて問わざるなり。官の吏員と雖もこの日村の巡村の期に際すれば、その難を避け敢えて近づかざるなり」ということですから、実際に死人が出たことがあるのかもしれません。

死者が出るようなことがあってもなおこのオシゲが続いたのはどうしてでしょうか。もちろん人が死ぬという感覚が今と違っていたことも大いに考えられます。しかし、ちょっと考えてみれば強制的に飲食させる伝統は今でも私たちの身の回りに生きていますから、そこには現代の私たちの生活感覚にも通じる心根のようなものがあったのかもしれません。

大学のサークルやクラブで新入生を歓迎する宴会では実際に死ぬまで酒を飲ませる例がつい最近もありました。これを氷室のオシゲとすぐに結びつけてしまってはいけませんが、集団で興奮状態になると相手が死んでしまうことも忘れて飲ませたり食わせたりしてしまうことは、日本ではそんなに珍しいことでないのは明らかです。[9]

また、それほど極端でなくとも、私たちは客として過大なもてなし、特に量的に過度のもてなしを受けることは日常的に経験します。折口信夫はこうした過度のもてなしをしようとする心を、自分たちとは違う日常に住む者がまれに自分たちを訪れてくれた時にどのようにもてなして良いか分からず、しかし自分たちの歓待を精一杯に表したい気持ちが強引に飲食を勧めるという形で表現されたのではないか、と推測しています。相手のことがよくわからないのだから、自分が一番良いと信じている方法を強く押し進める以外に方法がないと感じたのだろうというのです。[10] この考え方を採れば、住む世界の違うあなたを精一杯歓待したいムラ人達の気持ちがオシゲに繋がったと考えるのはそう難しいことではありません。

それにしても、「死んでしまっていいから全部食わせれば来年は豊作だ」というような激烈な興奮はどこからきたのでしょうか。食わせることにそれほど執着する気持ちはなぜ生まれたのでしょうか。その問を解くヒント

---

[8] 脚注１の田中千万吉さんに見せていただいたコピーによる。

[9] 最近の例では2006年07月22日に産経新聞東京朝刊に報道された事件がある。専修大学野球サークルの新入生歓迎会で一気飲みを強要された一年生（当時１９歳）が死亡した。

[10] 折口信夫全集ノート７ p.164 に「田舎に行くとむやみに食べさせられる。（中略）お酒をむやみに飲ますのも同じで飲酒を強いる側の礼儀なのである。（中略）相手は我々と習慣も土地も違い、生活の様式、感情の持ち方も違うので、どうすれば喜ぶかわからぬから、できるだけこっちがよいと思うことをつっこんですれば、相手によい感じを与え、よい効果が現れると考えていたものかと思う。我々がしてほしいと思っていることを、できるだけ、度を越しすぎるほどにすれば相手に対して良いと言うことになる。」とある。

はムラ人の「全部食わせれば豊作だ」という言葉そのものに潜んでいるように思われます。

「全部食わせれば豊作」ということは、食わせられないで残してしまえば来年は豊作にならない可能性がでてきてしまうというわけです。オデシコに使う米と小豆はともに大師田と呼ばれるムラの免租田で作られていました。免租田ですからムラのためのだけの作物を作る場所と考えていいでしょう。誰のものでもないムラの作物がここから収穫されるのですから、それはこのムラの存在を象徴するような意味を持っていて当然です。

そんな田畑から取れる小豆や米ですからムラの将来を左右する力をその食物が持っているとムラの人々が考えたとしても不思議ではありません。粥には次の一年の収穫を予め告げる力があり、小豆には力を触発する能力があります。ですから、ムラの田畑で取れた小豆と米で作った小豆粥を食べることは、体内にムラの将来、もっと言えばムラの存続を決定づけるような力を宿すことに他ならなかったのです。その力を残して捨ててしまうことに対する不安感は、食の根源を共同体の外部に依存してなんら恐ろしさを感じない現代の私たちからは想像もつかないくらい大きかったはずです。

霜月二十三夜のオデシコの時にこのムラを訪れるという超人間的な偶然をこのムラにもたらしたあなたは、ケンチャンと小豆粥を平らげる資格があると同時に、また義務も備えてしまっていたのです。

訪問者の役割

氷室に今まで一度も来たこともない、見ず知らずのあなたになぜそんな資格や義務が生じてしまったのでしょうか。あなたには一体どんな落ち度があったというのでしょう。

それは、あなたが偶然その日にそこに行ってしまったことと深く関わっています。もしあなたが氷室の人々と顔見知りであったらオシゲにあう可能性はずっと低くなるでしょう。なぜならこの日オシゲの接待に預かる者は出来るだけ偶然にこのムラを訪れた見知らぬ人である必要があったからです。

お大師講そのものがこうした来訪神の恩恵の大きさを偉大な仏教家のイメージにかぶせた祭であるという宮田登の指摘を待つまでもなく、来訪する神が決まった日にこのムラを訪れて人々に加護を与えるという、マレビトを尊ぶ感覚が氷室のムラの人々にもあったのは疑いのないところです。

この日のあなたは、ムラ人にとってはマレビト、つまり神だったのです。神ですから、食い過ぎや胃もたれなどあるはずもありません。出来るだけ沢山召し上がって頂こうとムラ人が考えるのは当然だともいえます。今年取れた、ムラを象徴し来年の方策を実現する力を持った食べ物を自分たちの思いの分だけ神に食べて頂く。それはなんとめでたいことでしょうか。

ムラ人の日常生活を支えるエネルギーの象徴である粥とその力の発動機である小豆を一緒に神に食べて頂くことには二つの意味があります。一つ

は神に対する感謝のささげものという意味で、一年間の恵に感謝し神を祭る気持ちから神に食べて頂くものです。

もう一つはそうした象徴的な食べ物を来訪神に食べて頂くことによって、ムラのタマシイを神に内在化させるような気分です。いわばムラで一年間作りためたパワーを神に注入するための儀式がオデシコなのです。これは同時にオシゲの理由にも繋がることです。出来るだけ沢山のパワーを神に注入しようと言う思いは当然のように強制的な食事に繋がるでしょう。

もちろん、ムラ人達はこの日村を訪れたあなた自身が丸々全て神であると思っていたわけではなさそうです。それはあなたを縛り付けてしまうという行いや、「死んでしまってもいいから食わせろ」というような発言にもうかがうことができます。彼らは神に対しては尊びもてなし、そして自分たちの次の一年を託すことに熱心ですがあなたには敬意を払うわけではありません。オシゲに見られるように、むしろ苦しませても平然としています。

これも当たり前のことですが、あなたは毎年決まって霜月二十三夜にこのムラを訪れるわけではありません。あなたがタイムトラベラーでも、一度このオデシコを体験してしまえばもう二度とは行きたくなくなるはずで、来年はまた全く別の人間がマレビトとして氷室を訪れそしてあのオシゲにあうわけです。つまり、神はいろいろな姿で毎年霜月二十三日に氷室を訪れるのです。

姿や形は変わるが中にいる神の霊魂は同じ。ムラ人達はこう考えたのではないでしょうか。あなたは神のタマシイを運ぶ運搬人で、神は人間であるあなたの中にあって、あなたをしてこの夜にわざわざムラを訪れさせたのです。あなたはそういうからくりを現すただ一つの姿としてムラ人達に歓迎されたのです。

次の年の収穫を豊にするための仕掛けをできるだけ沢山神に持って帰ってもらいたいと考えたムラ人達が、神の魂の容れものであるあなたの健康のことなど考えなかったのも当然だと言えます。昭和初期に還暦を迎えた老人ならばオシゲによる死者のことを覚えていたといいます。[11] 神の容れものであるあなたが万が一死んでしまっても、それは神の死とは全く関係ありませんから、ムラ人にはあなたの苦しさのことなど少しも気にならなかったのかもしれません。

さて、あなたは神のタマシイをムラに連れてくる役目でしたが、ケンチャンと小豆粥をたらふくごちそうになった神そのものはどこへ行くのでしょうか。託されたパワーとそれを発動させる仕組みは、新しい年の秋、ムラの豊作となって戻ってくるのですから、それは、いわゆる田の神の住む世界なのかもしれません。

あるいは、神はオデシコのあとムラ外れのどこかでふらふらしていても構わないのかもしれません。なぜなら、ムラの新たな収穫の力とそれを動

[11] 脚注 1 の田中千万吉さんのお話による。

き出させる力は既に神の中にあるからです。ムラ人は、あとはゆっくり小豆の能力が発揮されるのを待てばよいのです。

ちょうどそれは渡辺綱が切り落とした腕が小豆を触媒として乳母を鬼に戻したように、今度は粥が小豆を触媒として神を氷室の新たな収穫に戻すまでの時間の旅が終わるのを、農作業でもしながら待てばよいのです。